

主日礼拝説教 — 2016年3月6日

私はその方の靴のひもを解く資格もない

聖書 ヨハネによる福音書 1章 23～29節
使徒言行録 19章 1～7節

武田 真治

1、洗礼者ヨハネのことを

「ヨハネによる福音書」の特徴のひとつに洗礼者（バプテスマの）ヨハネについて多く語られている点があります。この1章だけでも既に三度も登場しています。他の福音書と比べて分量が多いだけでなく、高い評価を与えています。どうしてこれほど洗礼者ヨハネを重視しているのでしょうか。

最大の理由は、この時点でイエス様のことを本当の意味で「救い主（メシア）」と見做していたのは洗礼者ヨハネ一人しかいなかったことに拠ります。その点では、私たちキリスト者の先駆的存在だと見做しており、彼がイエス様を真の救い主だと指し示した姿は、私たちも学ぶべき点が多いと見ているのです。今日の箇所でも、「あなたは自分を何だと言うのですか」というユダヤ人からの質問に対して「わたしは荒野で叫ぶ声である」と答えている言葉は、私たちキリスト者にとっても、あるべき理想の姿を示していると受け取ることが出来ます。

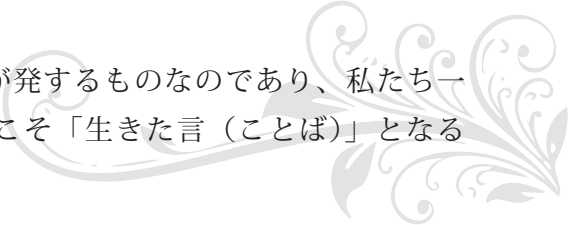
2、私は「声」

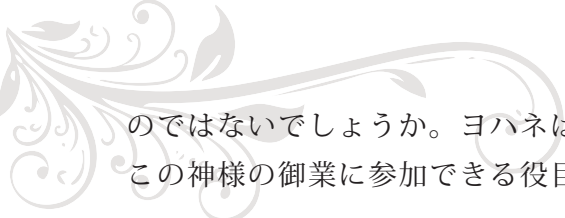
「ヨハネによる福音書」の冒頭は「初めに言があった。言は神と共にあった」でした。そして14節ではその「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」のでした。これがクリスマスを指していると言い得ます。次に為されるべきことは、この「言（ことば）」を世の中の人たちに伝えることでしょうか。その務めを担うのが「声」です。いくら素晴らしい言葉であってもそれを語る者がいなければ人には伝わりません。洗礼者ヨハネが自ら「私は声である」と語っている意味がここにあります。ですから、彼が自ら「声」だと言っていることは、その程度の存在に過ぎないと卑下しているのではなくむしろ、この務めにあることに誇りを持って語っていることなのです。「声」であることに光栄を感じて生きていると。

この点でまさに私たちも「言（＝福音）」を伝える「声」ではないでしょうか。その務めを一人一人が託されています。良き「声」として周りの方々へ「言を発する（＝発言）」者となって行きたいと願います。それこそが「伝道」ということでしょうか。

その際、ここで「声」と言われていることが大事でしょう。単なる「音」ではないのです。今、私たちの身の回りには、注意を促す信号音や警戒音があふれています。洗濯物が終わったと電子音で知らせ、「お風呂が沸きました」と教えてくれます。でも毎回、同じ言葉を同じ調子で言われると正直、うるさいなと感じることがあります。人間の「声」はもともと一人一人違っているものです。故に「声紋認識」も成立します。それなのに、例えば、マニュアルを作って全員が同じ言葉を同じ調子でしゃべると、それは人の声ではなくうるさい言葉、単なる音になってしまいます。それは伝道ではない。

イエス様のことを伝える「声」は私というこの固有の声が発するものなのであり、私たち一人一人によってその発声や伝え方は異なるのです。それでこそ「生きた言（ことば）」となる





のではないのでしょうか。ヨハネは自分の「声」で、尊い「言」を語れることを喜んでいるのです。この神様の御業に参加できる役目を、ヨハネのように誇りを持って為して行きたいものです。

3、洗礼と洗礼を授ける権威の問題

以上のように、「言」がこの世に来て、それを語り伝える「声」があり、次に来るのはそれを聞いた人たちの応答でしょう。洗礼者ヨハネがその名前の通りに人々に「洗礼」を求めたのは、彼が「声」として語る「言」に対して、為すべき応答がまさに「洗礼」という行為であるということだったと言い得ます。福音が伝えられた時、それに応えようとする者は、これまでの自分の生き方を悔い改め、新しい生き方へと向かうためにまず受けるべきことが、これまでの自分を水で清めてもらう「洗礼」でした。「洗礼」こそ、これからの自分の歩みを神様の方へ向ける、初めの一步です。

この点に於いても洗礼者ヨハネと私たちクリスチャンとの深い連なりを見ることが出来ます。後のキリスト教が、入会の儀式としてこのヨハネの宣べ伝えた「洗礼」を採用して行った理由は、もっぱらイエス様がこのヨハネの洗礼を受けられ、そして公の伝道活動を始めて行かれたことに拠っていますが、それはイエス様がこのヨハネの洗礼を良きことと認められたことを証してもいます。それ故、私たちも「洗礼」をもって信仰生活を始めて行くのです。

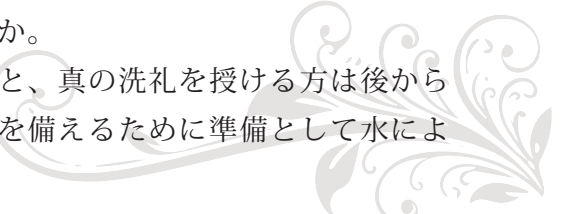
ただ、彼が人々に対して求めた「洗礼」に関して、当時のユダヤ人の特に「ファリサイ派に属していた」(24節)人たちから文句が出ます。即ち「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼を授けるのですか」と。

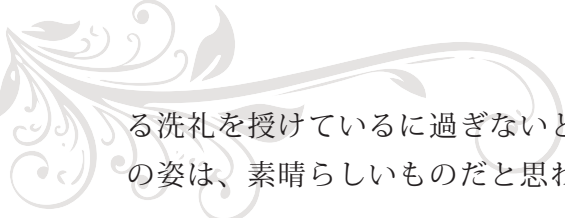
この言葉は、特別な存在でもないのに何の権威で、何の権利があって「洗礼」を行っているのかという批判です。このファリサイ派とは当時のユダヤ教側の権威を持っていたグループであり、後のユダヤ教の指導的役割を果たしていく宗派です。自分たちが地位や権威があると自負している人たちは、何事でもそれを為す権威や権力、権利に必要以上にこだわるようです。この批判に対してヨハネは二つ答えています。

一つは「わたしは水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる」です。「あなたがたの知らない方」とは、ユダヤ人のファリサイ派が信じない(=認めようとしない、その意味であなたがたが知らない)イエス様のことです。自分が授ける洗礼は「水(=単なる清め)」によるものでしかないが、イエス様の洗礼は「聖霊(=罪の赦しを為す)によって」(33節)授けられると述べています。自分の洗礼とは根本的に異なっていると。これも「声」として、イエス様のことを証している言葉です。

もう一つは「わたしはその履物のひもを解く資格もない」(27節)です。当時の履物とは、皮のサンダルのことで素足に履きました。暑い中、衛生状態も良くない当時、素足で履き続ける皮製品がどれほどの状態になり悪臭を放つかは、ある程度、想像が出来ると思います。当時のユダヤ教のラビ文書には、師匠に絶対服従の弟子の為すべきことの項目の中にも、師の履物を脱がせる行為は(=そこまでしなくても良いと)含まれていなかったそうです。奴隷でも主人の履物のひもを解くことは嫌がりました。しかしヨハネはそれさえしたくてもさせてもらえない程、特別な権威を持っておられる方がイエス様だと述べているのです。これもまた「声」として、イエス様のことを証している言葉ではないのでしょうか。

つまり、ヨハネは、自分には真の洗礼を為す権威がないこと、真の洗礼を授ける方は後から来られる方であり、自分はそのことを人々に知らせ、その道を備えるために準備として水によ





る洗礼を受けているに過ぎないと表明しているのです。あくまでも「声」に徹しようとする彼の姿は、素晴らしいものだと思います。

4、私たちが洗礼を受ける権威とは。

翻って、では私たちが教会で「洗礼」を受ける権威はどこにあるのでしょうか。

イエス様から直接に授けられたなら、それはものすごい権威のある洗礼となるでしょう。また、イエス様の直弟子に授けられた洗礼もまだ権威が感じられます。しかしもはやイエス様の時代から、遥かに時が経ち、遠ざかり、このような日本の小さな教会の執行する「洗礼」のどこに権威が宿っているのでしょうか、何の権利があって、この「洗礼」によって「あなたがたの罪が赦された」と言い切れるのでしょうか？

その権威は教会にあるのではありません。この広島教会が130年を超える歴史があるからでもなく、ましてや牧師にもその権威はありません。牧師が教団の正教師になっているからと言っても授洗の資格が与えられているに過ぎないのです。私たちが洗礼を執り行う権威はただひとつ、ここにイエス様が共にいて下さるといふこと一点に尽きるのです。それは、今日のヨハネの言葉から言えば「あなたがたの中に、あなたがたの『知っている方（＝イエス様）』がおられる」と言い切れるからです。

イエス様は「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」（マタイ18章20節）と約束してくださいました。そして、イエス様ご自身が洗礼と聖餐を行うように私たちに命じられました。そのために、天から「聖霊」を注いであげようと。

そこに私たちが洗礼を執行する権威が生じるのです。そして今も聖霊を通して、ここに共にいて下さるのです。

宗教改革者カルヴァンの改革派教会（＝広島教会の源）の伝統の中に、洗礼式の時（聖餐に於いても）必ず「聖霊の働きを求める祈り」（エピクレーシス）を献げます。「聖霊よ、ここに来てください」と。この祈りなしに洗礼も聖餐も何の権威を持つことはないのです。

礼拝説教より抜粋

